

夢いろの曲り角で

今江祥智 文 井出情児 写真



絵のない絵本 アンデルセン〓作 山室静〓訳 岩崎ちひろ〓画
こころのうた 八木重吉・萩原朔太郎他〓詩 初山滋〓画

わたしがちいさかったときに 長田新編〓原爆の子〓他より
岩崎ちひろ〓画

愛かぎりなく ネクラースフ〓詩 谷耕平〓訳 岩崎ちひろ〓画

星の童話集 宮沢賢治〓作 浜田台児〓画

花の童話集 宮沢賢治〓作 岩崎ちひろ〓画

蓼科の花束 中尾彰〓絵と随筆

万葉のうた 万葉集より 大原富枝〓文 岩崎ちひろ〓画

光る砂漠 矢沢幸〓詩 周郷博〓解説 藺部澄〓写真

足跡 矢沢幸〓日記 周郷博〓解説 藺部澄〓写真

啄木のうた 石川啄木〓詩・短歌 城侑〓編 川田幹〓画

翼あるうた〓女流詩人集〓 新川和江〓編 堀文子〓画

たけくらべ 樋口一葉〓文 岩崎ちひろ〓画

小さな雪の町の物語 杉みき子〓文 佐藤忠良〓画

野の花は生きる いぬいとみこ〓文 司修〓画

わたしの花物語 壺井栄〓文 深沢紅子〓画

赤い蠟燭と人魚 小川未明〓文 岩崎ちひろ〓画

わたしのギリシア神話 富山妙子〓文と画

―エロースへの回帰―

サロレン・リムセ 早船ちよ〓文 林田恒夫〓写真

―失われたふるさと―

美しき津和野 中尾彰〓絵と随筆

雪の童話集 宮沢賢治〓作 佐藤昌美〓画

海の記憶 岡野薫子〓文 須田寿〓画

林檎の木のうち 神沢利子〓詩 大島哲以〓画
いないいないの国へ 神沢利子〓詩 斎藤真一〓画

夢いろの曲り角で

昭和56年2月20日初版発行

文・今江祥智 ©

写真・井出情児 ©

発行所・株式会社 童心社

東京都新宿区三栄町22

電話(357)4181 振替 東京1-75504

写真植字・東京光画株式会社

製版・印刷・小宮山印刷株式会社

製本・株式会社難波製本

NDC 914.6・96P・21cm

いろいろの曲り角で

祥智文 井出情児 写真





この本によせて

男の旅だち——という時がある。男の子が、一人前の男になろうとして、この世に出発していく時で、それが何歳の時になるかは、むろん、人さまざまである。

それなら当然、女の旅だちというものもあるはずで、女の子が一人前の娘らしくなることと、精神的に自立するときのことと、ボーヴォワール風にいえば、人は女に生れるのではなく、女になるのだ……ということだろう。

父親にとつて娘というものは、年と共に何やらまぶしくなるもので、じっくり見つめたりできるものではない。母親のかけから、ちらりほらりと覗き見ては、ははあ、もうあんなになりよったか……と思い、はらはらもどきもどきもしているものなのだ。

ところが。

わたしと娘の間にいた母親がいなくなってしまった。娘と二人暮らしになった。世間の父親のように、母親のかけから眺めるというぐあいにはいかなかった。

母親には、親であると同時に、ひとりの同性として娘を見る目もあるようだが、こちらは異性ながら、そんな目もあるふりをしなくてはならないときがあった。まぶしさに目を細めてばかりはいられなくなった。世間の父親よりたくさん、娘とおしゃべりしなくてはならなかった。気まぐれではなく、必要欠くべからざるものから、あつてもなくてもいいものまでの買い物にもつきあった。学校の宿題から病院まで、こまごまさまざまなことにつきあった。

だから、世間の父親より娘のことを知っているつもりだった。娘が女の子からぬけだし脱皮し、一人前の娘らしくなるときも分かる

つもりだった。

それが、そうはいかなかった。

生身なまみの娘を見てでなく、一枚の写真を見て、どきんとしてそいつを知った思いがした。

親子共通の友人のところへ娘が遊びにいったとき、一人の若いカメラマンが遊びにきていた。彼が、そこにあったごく当り前のカメラを手にして、ふいと何枚か写真をとってくれた。わたしはそのことを知らなかった。写真なら、誰にでもうつせるカメラで、ばいばいとつたやつが何十枚とあり、赤ん坊のときから、おしめさまを通り、小、中、高校生のときまで、折にふれてうつしたものがどっさりあり、それが成長のアルバムだと思っていた。

ところが。

ひきのばされた写真が送られてきたのを見て、どきんとした。これがわが娘であるか。

何もかも見ているつもりで、実は節穴だった父親の目とちがい、練達のカメラマンの目が、レンズを通して見つけ、とりだした娘の実像をつきつけられた思いがあった。

その写真から話が始まった。

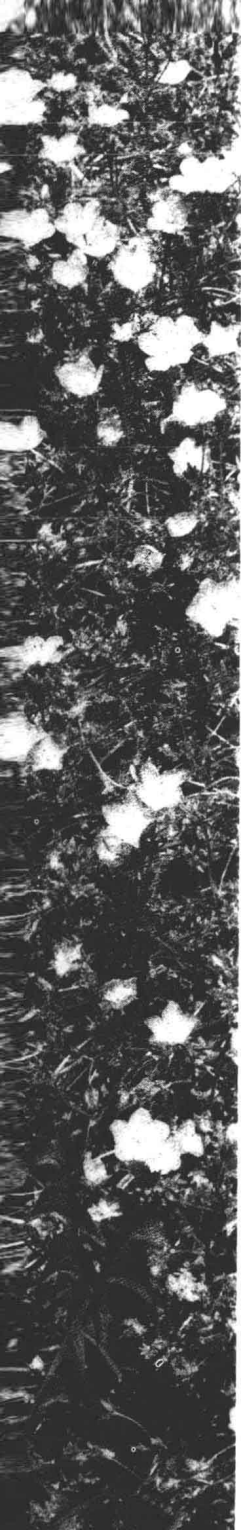
ひとりの女の子が、一人前の娘として変身する時を、写真集としてつくってみよう。その父親はたまたま文章を書く男だったから書いてきた娘についてのエッセイをそえて一冊にまとめてみよう。

そして作業が始められた。

これは、ひとりの父親と娘のつきあいの記録であり、父親が娘を見たところが文章に収められている。そして娘は写真の中から父親を見ている——というふうに作られている。

もくじ

男の中の男.....	9
はくの育児日記.....	15
『優しさ』より.....	33
娘への手紙.....	41
『優しさ』ののちにくるもの.....	57
『冬の光』より.....	67
創作 まぼろし人形川の中.....	75

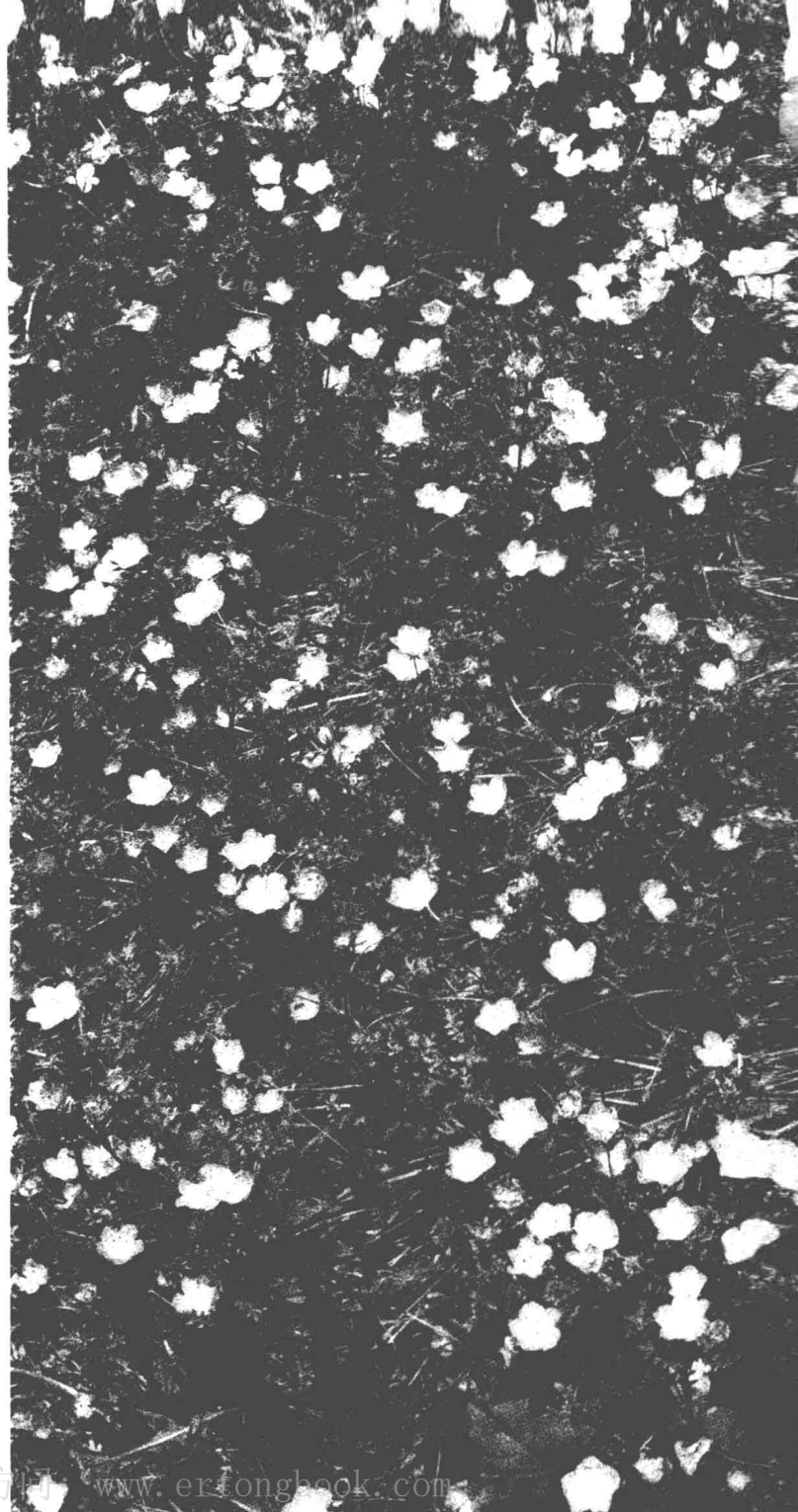


男の中の男

童話作家にとって娘とは何か——知りたければ育児日記をつけなさいと、理論社の小宮山量平さんが「忠告」してくださった。ひとりの男にとって女の子とは如何なるものも分かるユニークな日記になるよ。なったら、出版しよう……。

「赤ちゃん日記」を買い込んで書き始めたが、一か月ともたなかった。子どもの成長の早さに追いつけなかったのだった。

童話作家にとって五歳の女の子とは何か——を書いてくださいと、『母の友』誌の編集者が「注文」してくれ、注文に応じて一年間書いた中の一回分が、これである。日記をつけるのをサボった父親の申しわけの一文である。このときはまだ母親もいた……。



いつだったか。『母の友』誌に、こんなアンケートがあつた。もしもあなたの子どもに、この世で一番エライのはだれかときかれたら何と答えますか。

一番エライ人なんていません、しいていえば働いている人たちでしょうとか何とか、色とりどりの答のなかで、異彩を放っていたのは、畏友瀬川康男のもので、ダンナは大威張りだ答えておつた。

「オレだ。よく覚えておけ。」

わたしは感動し、親ならばかくあるべし、とうなずいたのだったが、ひるがえってわが身を思えば、そんな自信はさらさらない。

幸い、娘の冬子は、まだそんなことをきいたことはないが、とうちゃんたるわたしはときどき考える——男の中の男はだれか……。

たとえば風来山人、東洲斎写楽、高杉晋作、日柳燕石……といった一癖も二癖もある野郎どものことが、頭のすみっこをうろうろする。だが連中は、とうちゃんとしてならどうか……。

そんなある日、わたしは胸うたれる一通の手紙を読んだ。できれば全文引用したいほどいい手紙で、父親としての優しさと威厳にあふれている。差出人はエルネスト・チェ・ゲバラ。ポリビアで殺された、キューバの革命家。その男が娘にあてたものである。

——……私たちの敵と戦うために、遠いところで私はできるだけのことをやっているのだが、まだこれからお前と離れていなければならない。おまえにはこのわけがわかるだろう

う。決して大きなことではないのだが、^{アルコ、エス、アルコ}必要なことなのだ。だから、私がおまえを誇りにしているように、おまえも父親をいつも誇りにすることができるよう……。

*

わたしはこの手紙を女子大の教室でも読み、男と父親とゲリラについての短い話をした。数日して、ひとりがやってきてさやいた。

―先生のいうてはったゲバラいうお方の、とつてもええポスター売ってはりましたえ。
わたしはこの女子大生に案内されてデパートへ行き、アメリカ製の（皮肉なことだ）ゲバラのでっかいポスターを買いこんできた。

ポスターを書斎の襖にはりつけると、冬子が聞いた。

―このおひげのおっちゃん、だれや。

―ゲバラという人や。

―何した人や。

そこでわたしは、五才の娘にキューバ革命の歴史とカストロとゲバラについて短い話を
してやった。

―ふうん。ええ人やったんやなあ。

―そうや、ま、男の中の男ちゅうとこや。

―そうか。ほんで、ええ顔してはんのやな。

それからとうちゃんとゲバラのポスターを見比べてからつけ加えた。

—おとうちゃんも、ちょっとヒゲはやしてみたらどうや……。

そこでまたわたしは、キューバの革命家たちがヒゲをそらないわけを話し、当節の日本の若い衆における軽薄なヒゲの流行を嘆き、そやさかいに、とうちゃんはヒゲをはやさんのである、と演説し、そんな、ひとのことを気にするよりも、将来、こんな男をこそ婿として見つけなければならぬと結んだ。

*

それから数日して、フォーク歌手の高田渡さんが遊びにきた。「自衛隊に入ろう」の作詞、創作者の青年である。冬子は、高田さんが舞台で歌うのを初めてきいたときから、この歌がすきだった。とうちゃんの自転車にのっけてもらって街を散歩中にも、よく大声で合唱してくれたものだ。ところで、その歌詞の中に、

へ男の中の男はみんな

自衛隊に入って花と散る

パツ！

というルフランがある。その日、高田さんが歌ってくれた「自衛隊に入ろう」をきいていた冬子は、そっととうちゃんの袖をひっぱっていった。

—ゲバラは男の中の男や、いうたやろ……。

いや、男がちがう。これは風刺の歌や、逆説や——では説明にならない。それでその晚とうちゃんは、いつもは二冊読んでやる絵本を一冊にして、この痛烈な和製フォークソ

グを説明しなければならなかった。教育は早いほどよく、かんで含めるようにしなければならぬ——というのが、教員体験者であるわたしの持論である。とくに、女の子に対して男というものについての教育は……。

わたしの演説がカストロよりよっぽどへただったらしく、冬子は途中でクウクウいびきをかきはじめた。そこでまたわたしは、自問自答したのである——男の中の男とは何か……。

（「家族の歌」より）一九六八年



2 ぼくの育児日記

日記なんかつけなくても、娘はどんどん成長する。母親がいなくなっても、娘は成長していった。父親はふたり分働いた——つもりだったが、そうした父親にもおかまいなしに、娘は育っていった。
これはそんなときの父親のおくればせながらに書きつけたメモランダムである。申し開きでもある……。

